

色んなヤツらと人理修復する事になりました

萩村和恋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

軽い気持ちでマスター適性を受けたら採用された藤丸立香！

人間離れした自称怪物系の青年、巫部颯也！

勘違いされまくり系の少女、春風聖香！

この三人がマスターとなり色んなヤツらと人理修復を行っていく『聖杯探索』が、今始まる。

目次

前日譚く藤丸立香編く	1
前日譚く巫部颯也編く	4
前日譚く春風聖香編く	6
序章く特異点F、炎上汚染都市冬木く	
壱話、人理が焼却された日	9
弐話、燃え続ける町の中で	14
第参話、初めての敵対サーヴァント	19
オラァ！設定回だよおおおお！	26

前日譚く藤丸立香編く

私の名前は藤丸立香^{ふじまるりつか}、何処にでもいるごく普通の女子高校生だ。家族構成は父、母、それと兄がいる。趣味はペットショップで動物を見ることと読書。苦手なものは特になし。成績は中の下くらいで運動神経は良い。

オレンジのセミロング、琥珀色のパッチリと開いた目、顔立ちは整っているが別段可愛いという訳でもない。胸は普通、美と形容すべき胸：らしい、お腹は引き締まっではないがふくよかでも無い、痩せている方だ。

さて、今私は駅前で気になるものを見つけたので、そこにいる。

「ようこそ、さあさこちらに来てください。」

「あつ、わかりましたー。」

マスター募集…なんのマスターかはわからないが、まあ面白そうだと思つて軽い気持ちで受けていた。

自己紹介を済ませ、簡単な質問や何やら変な機械を通しての検査をした。

後は少し待つてれば結果が出るそうで、私は椅子に座りながら待つていた。

「藤丸様く、藤丸立香様く。検査結果をお伝えに来ました。」

先程、検査をしていた時にいた若い女性が来たので、私は返事をした。

「検査結果はですね…。」

「はい…。」

「採用です！見事最後の枠でマスターになれましたよ！」

「え…？さつ、採用うううう!?!」

私の叫び声が、テント中に響き渡った。

その後、私は変なテンションのまま家族にその事を伝えた。

どうやらカルデアと呼ばれるところに行かねばならないらしく、明日迎えが来るので家族にもその事をお伝えください…と若い女性ス

タツフにそう言われたので伝える事にしたのだ。

母も父も兄も心配そうにしていたが、私は大丈夫だよ、危険な事でもないよと笑顔で言つて、家を後にした。

あんな事になるとは知らずに、私は能天気にかルデアに行ったのだ。

以下藤丸立香設定

年齢：15歳

身長：158cm

体重：不明

バストサイズ：C（形、ハリなどの全てが良い、美とも形容すべき胸）

霊基属性：中立・善

魔術回路：???

属性：???

趣味：ペットショップで動物をみること、読書

好き：動物、兄、可愛いもの

苦手：特になし

特技：暗い雰囲気をぶち壊すこと。

天敵：不明

オレンジ色のセミロングをサイドテールで纏め、琥珀色のぱつちりと開いた瞳、顔立ちは整っているが別段可愛いという感じではないらしい。

人一倍の勇気と大胆さを持ち合わせ、どんな状況でも良い方に向かおうとする少女。

オタク趣味があるらしく、サーヴァントなどを見てもその趣味からすぐに順応出来る。

魔術等は全くの初心者で、自身の属性、魔術回路の数さえもわから

ないほど。

頭は悪いが運動神経が良い。

前日譚く巫部颯也編く

ソレは人間ではない。

青年の姿をしているが、その正体は人間ではない。

その名前は——巫部颯也。かななぎりゆうや

人理継続保障機関フィニス・カルデア

その一つの個室の中——

「オルガマリーたああああああん！」

「いーやアアアアア！」

「逃げるなようーオルガマリーたん！俺の愛を受け取ってー！」

「アンタみたいな変態いやよ！来るなマジ来るなア！」

藍色の長髪に紫と藍のオッドアイの俺：巫部颯也はここカルデアの若き所長、オルガマリー・アムスフィアに抱きつかうとしていた。いや、最近は忙しそうにしていたオルガマリーたんが今日は休みだそうで、だったら一緒に休もうかとデートしようぜい！って誘ったらガンドぶち込まれながら断られた、全く俺が人間だったら倒れてい

る。
「なんで私の全力のガンドで物怖じもしないのよ……この化け物！」

「何言っただようく、そんなの前から言ってるじゃんかよう。」

そう、俺は化け物なのだ。

一言で化け物、と言っても色んな種類が浮かぶだろう。

それに俺は都市伝説としての存在でもある……主に日本由来の、だが。

「ほれほれ！今日は俺と部屋デートするのが吉、だぜい？まあそのまま涙目になっても良いけどな！」

ケフフフと高笑いする俺、オルガマリーたんは涙目でレフに助けを求めている。

「ハハハハハ！レフなんぎ来ねえよお！っーか頼んなら俺を頼れバーカー！」

「アツ、アンタ何かよりレフの方が頼りになるもの！アンタみたい

なよくわからない変態怪物野郎なんかよりレフの方が良いもん！」

「あつ、言ったなオルガマリーたん！良いかアイツは絶対何かやるぞ！良いからコレを持ってなさい！」

俺は有り難そうな犬の模様のお守り（俺の血と髪の毛と歯とかまあ色々なものを錬成したものを入れている、三回くらいならどんな願いでも叶えさせれるし防御力も高いので壊れる心配も無い。何処かのランプみたい！みたいな意見は知らないし聞こえない。）

「いらないわよ！どうせ変なもの入ってるんでしょ!?!」

「入ってない入ってない、これはなんでも願いを三回叶える系の魔道具何だぞー。さあさあ持ってなさいって！あつでも本当に逆転できなさそうな時とかに使うんだぞ？生き返りたいーとかそんなんだ、いいな？怪異級の魔道具なんだからなソレ、チンケな願いは願い下げだね。」

「なつ、なんでそんなもの持ってんのよ！そんなに強力な怪物なの…!?!」

「主軸は日本に伝わる都市伝説だぜ？それ以外にも沢山の都市伝説が混ざった変態さんだよ。」

「よくわからないわよ………まっ、まあ、取り敢えず貰っておくわよ。」

オルガマリーたんは俺から犬様のお守りを受け取り、ポケットに無造作に突っ込んだ。

「じゃあ次は俺の愛を……！」

「それは要らないわ。」

キツパリと言われてしまった…。

この翌日、俺、オルガマリーたん、そしてあと二人…立香さんと聖香たんがとんでもない所に行ってしまう事は知らずに。

前日譚く春風聖香編く

巫部颯也がオルガマリーと自室で騒いでいた時、別の個室にはとある少女がいた…。

「Zzzz…Zzzz…」

金髪の腰まであるロングヘアに、緑色のタレ目の少女がベッドでヨダレを垂らしながら寝ていた。

「しゅーやあ…ぐへへ…可愛いよお…おねえちゃんがんばりゆかりやねえ…はっ！」

寝ていました…完全に。

皆様初めまして、はるかぜせい春風聖香です。先程はだらしない姿を見せて申し訳ありません…。

「えっ、えつと…今日はお休み…だから寝てもいいはずですよ…でも！ダラダラしすぎたらダメって集哉しゅうやにも言われたもん…。」

集哉、というのは僕ワタシの弟です。

とてもしつかりしていて…僕ワタシよりも優秀な魔術師さんなんです。

本当ならカルデアに来るのも集哉のはずでした…今は病気に罹つちやつて、ココには来れないんです。

それで集哉の代わりにボクが来ることになりました。

ダメ人間の僕ワタシなんかより、しつかり者のあの子の方が絶対に役に立つ筈なのに…。

「ダメです…こんな自分を卑下してはいけません…。集哉に悪いよ…。」

今のままじゃダメ…そう思った僕ワタシは、部屋を出て彼に会いに行くことにしました。

ロマニ・アーキマンさん…カルデアにいる医者さんです。甘いお菓子等が好きならしく、良く一緒にお茶をする仲です。

お気に入りのもふもふの猫と犬の一对のぬいぐるみを抱き、部屋から出ました。

「Dr. ロマンさんー、今お時間大丈夫ですか？」

部屋から医務室に向かう途中、見覚えのあるオレンジ色のポニテの男性を見つけて声を掛けました。

「…ん？ああ、ハルカゼちゃんか。時間は大丈夫だよ。」

微笑みながら答えてくれました。手にはカルテを持っていました。

「よし、じゃああの部屋に行こっか。」

「はい♪」

ロマンさんとある部屋に向かう途中……とある青年とすれ違いましたが、僕はそれに気づいていませんでした。

「そういえばソレ、誰のカルテですか？」

部屋について、お菓子とお茶を用意しながらロマンさんの持っているカルテについて聞きました。

「ああ、コレかい？一般人枠の最後のマスターのものさ。」

「一般人枠……どのような方なのです？」

「見てみるかい？」

「見せて貰えるなら……。」

はい、と見せてくれた紙には、可愛い少女の写真と身長などが記されてました。

「藤丸立香……ちゃん……。可愛い子ですね。ロマンさんはこういう子好みですか？」

「いきなり何を言うんだい!?ボクは好みじゃないなあ。可愛いとは思うけど……。」

「ですよね!?この子メツチャ可愛いですよね!絶対に颯也君には合わせちゃいけないレベルですよね!」

「ハハハ……彼はそんなに見境ないのかい？」

「見境ないですよ……多分彼、呼んだ英^{サーヴァント}霊が女性なら見境無く、可愛かったら男性でも襲うと思うんです……!この前、女性職員にお茶を誘ってたんです、断られたら次の人……断られたら次の人!彼はそういう変態さんなんですよ!」

「そんなに見境無いかい…。」
などとお茶会を楽しみながら僕達はこの日を過ごしました。

この翌日、私達があんなことになるなんて…。

序章く特異点F、炎上汚染都市冬木く
壱話、人理が焼却された日

…ぱい、せ…いい、起きて下さい。

微睡みの中、私は少女の声を聞いていた。一体誰だろう…というかさつきから冷たいな…私、床で寝てたのかな…？とりあえず目を開けよう。

「ん…えつと、誰？」

目を覚ました私の近くには、謎の生物と同じ年頃？の少女がいた。

「私はマシユ・キリエライトです。こっちのもふもふした生き物はフォウさん。先輩が倒れていたのをフォウさんが見つけたんですよ。」

成程、やっぱり私は倒れていたらしい。全くそのような記憶はないが…余程疲れていたのだろう。

「キリエライトさんと、フォウさん…か。私は藤丸立香。マスターの一般人枠の最後ね。えつと…ココはカルデアであってるよね？」

手を床につけて立ち上がりながら、私はキリエライトさんに確認をとる。

「はい、ココは人理継続保障機関カルデアです。それと私のことはどうぞマシユとお呼びください。えつと…藤丸先輩は初めて見る顔ですが、今日初めてここに？」

「うん。今日ここについたの。マシユはカルデアの局員さん？それともマスターの一人？」

「私は局員です。」

と、二人で話していると、前から人が来た。

「おや、見ない顔だね。マシユ、そちらの子は？」

紳士然とした格好の好青年だった、この人は一体…？

「レフさん。コチラは一般人枠最後のマスター、藤丸立香先輩だそうです。床に倒れていたところをフォウさんが見つつけてくださいました。」

マシユはレフと呼んだ好青年に説明をしていた。好青年の方は話を聞き終わると、ふむ、と言ってこつちに手を伸ばしてきた。

「私はレフ・ライノール。カルデアの顧問さ。よろしく。」

「藤丸立香です、よろしくお願いします。」

私は緊張しながらも握手に応じた。

「…つと、そろそろマスター達の集合時間だね。丁度いい、部屋まで送っていいこう。」

「集合…ですか？」

「ああ、時間ギリギリになってしまいうからね、早く行こう。」

「あつ…はい、じゃあマシユ、またね。」

別れ際、マシユに手を振ってからレフさんについて行く。

「あら貴女、眠ってるなんて随分と余裕ね？」

「えっ、えーつと…。」

マスター達が集合しているという部屋では話し合いが行われようとしていて、私とレフさんはギリギリだった。その後は空いていた席に座ってカルデアの所長のオルガマリー・アニメスフィアという美人な女性の話を聞いていた。聞いていたのだが…眠たくて眠たくてつい眠ってしまい、起こされたと思ったら前方には怒りに顔を染め尽くした所長がいたのだ。

「貴女、一般人枠最後のマスターでしょう？」

「はっ、はい！」

「大事な話をしてる時に眠るなんて随分と余裕なのね？それともやる気が無いのかしら？」

「すっ、すみません…。」

「いや、いいわ。貴女は出て。レフ！コイツどこかに連れて行って！」

「ああ。」

レフさんに連れられ、部屋の外に行く。

「えつと…すみません、レフさん。」

「別に大丈夫さ。さて…ん？」

「レフさん、何故先輩は外に？」

「大事な話をしてる時に眠ってしまったってね、オルガマリーから外に出せと命じられたのさ。マシユ、藤丸くんを彼女の個室まで連れて行ってくれるかい？」

「わかりました。先輩、個室まで案内します。」

「あつうん、わかったよ。レフさん、本当にすみません…。」

「何、礼には及ばないさ。ではまた。」

レフさんは中に戻って行った。

「先輩の部屋は……ここですね。」

「ありがとう、マシユ。」

ニコツと笑ってマシユにお礼を言う。マシユも少しニコリと返してくれた。

「では私は戻りますね。」

そう言っ来て来た道を戻っていくマシユ、ソレを少し見届けて個室の中に入った。

「今入ってまーきつ、君は誰だ?! ココは僕のサボリ部屋だぞ！」

「いや貴方こそ誰ですか?! っていうかサボリ部屋…?! ココ私の部屋じゃ…。」

個室に入ると、なんとというか全体的にほわほわした雰囲気男性がお菓子をつまみながら寝転がっていた。着ているものを見る限りお医者様だと思うけど…。男性は不審なものを見る目で見ていたが、直ぐに納得したのか直ぐに話しかけてきた。

「私の部屋…ってことは、君、一般人粹最後のマスターかい？」

「? はい。藤丸立香と申します。貴方は？」

「ボクはロマニ・アーキマン。ここカルデアのドクターだよ。」

と、男性はゆるふわとした笑みで答える。

「はあ…なんでドクターがココに？」

「マリー…所長がね、僕がいると空気が緩むからって理由で部屋から追い出したんだ。そういう君はどうしてココに? マスターなら今は全員集合してるはずだろう?」

「ねっ、眠っちゃって…ソレで追い出されました。」

「なるほど…。」

それから暫く二人で話し込んでいると、部屋のモニターがついた。
「ロマーニ、今から管制室の方に来てくれ。」

モニターに映ったのはレフさんだった、ドクターの呼び出しらしい。
い。

「ん、わかったー。今行くよ。」

「ああ。」

「…という事だから、藤丸君、僕は行ってくるよ。」

モニターが切れ、ドクターは立ち上がって部屋から出ていった。

その数分後だった、私は部屋で寝っ転がっていたのだが、突如遠くから…管制室、先程私がいた場所で今ドクターが向かって行った場所、恐らくそこで爆発が起きたのだろう。

「いつ、行かなきゃ…！」

まだあそこにはマシユ達がいるはずだ、早く助けに行かないと…！
私はひたすら走り続けた。

そこは、地獄だった。

沢山の血だ、沢山の瓦礫だ、沢山の…人の、呻き声だ。

まだ生きている人達もいたけど、その殆どが死にかけだった。今はマシユを探そう…。

「マシユー!?!何処ー!！」

「オイ、そのの!マシユならこっちだ!！」

マシユへ叫びかけていると、1人の青年と同年代くらいの少女、それと倒れ掛けのマシユがいた。

「マシユー!！」

かけよってマシユの方に行く。

「せん…ぱ…い…う…」

マシユは下半身を瓦礫に潰され、動けないようだ。近くにいた男女は他のところにいった、他にも助けられそうな人を助けに行ったのだろうか？

「うん、そうだよ!今助けるから…!！」

「行けません…！先輩は早く逃げて…！」

「嫌だよ！折角知り合えたんだもん！」

「でっ、ですが…！」

「なら…：…なら、最期までマシユの近くにいるから…！」

私はマシユの手を取って握った、もう助からないのかもしれない、でも私は、最期まで、最後の時まで彼女と共にいよう。

火の勢いは増してドンドン周りと燃やしていつてしまう。

恐らく、そろそろ私たちは死ぬだろう。先程見た男女も、ココいる皆は全員…

『——レイシフト先、2004年、冬木。レイシフト適正体四体確認、レイシフトを実行します。』

そんな声が聞こえた気がした…：…瞬間、私は意識を失った。

式話、燃え続ける町の中で

「オイ、お嬢ちゃん！死にたくねえなら早く起きろ！」

「先輩！起きてください！」

声が聞こえる、それに暑い……

「アレ……ここ何処……っ!？」

目を覚ますと見知らぬ燃えた街……いや、ここは見た事がある……

「なんで……なんで……冬木にいるの……?？」

「よつと」

青年が拳を骸骨の怪物に打ち込む

「ハッ！」

マシユが、盾を骸骨の怪物に打ち込む。

目の前には縦を持ったマシユ（いつのまにかエツチな鎧を着てる、後で事情を聞こう。）と、あの時他の職員を助けるべく私達と別れた青年が骸骨の怪物と戦っていた。

「聖香ー、お嬢ちゃん……藤丸ちゃんの方はどうだー?？」

緊張感の無いゆるゆるな声が私の近くに寄り添っていた少女に投げ掛けられた。

「大丈夫です！もう落ち着いてます！それともっと緊張感を持ってくださいよ颯也君！」

「気は抜いてねえ、それにあともう少しでこちら辺の敵は一掃出来るしな。聖香ちゃんは藤丸ちゃんを見守ってる。」

言うつと青年は、何処かからか斧を取り出して

「二振りすれば運命は狂い、二振りすれば死の呪いお前らを蝕む！
デスタン・ドウヴニール・フリーマレディクス・イオン・アツシユ
運命狂わせし呪いの斧！」

と言つて斧を二回振った。すると、辺りの骸骨たちが次々と崩れて（私の目からは骨が粉のようになっていくように見えた。）行ったのだ。

「よーし、討伐完了！皆ー、大丈夫か?？」

斧を振り終わり、明るく破顔した彼に私達三人は言葉を無くしていた。

「うっし、じゃあ自己紹介しよ」「キヤアアアアアア!」「!?」
青年が言葉が続けようとした時、近くの方から叫び声が聞こえてきた。

「この声…まさか…」

「所長です!行きましよう!」

「ええ!」

私達は叫び声の方に向かった。

イヤ!死にたくない!助けてレフ…!助けて…!

「ここどこ!?なんで私バケモノに追いかけられてるの!」

ガンドを撃つ!逃げながら…まだ死にたくないから、わずかでも希望があるのなら…!

「キシヤキシヤ!シャシャ!」

バケモノが奇妙な音を立ててよってくる!

「ハア…ハツ…ハア…キヤツ!」

躓いて転ぶ、骸骨たちは遠慮なく私に向かってきて襲いかかってくる…!

「助けて…!助けて…!」

「おうよ!」

助けに来たのは—怪物だった。

「オルガマリーさんに手え出すんじゃねえええええええ!」

所長と骸骨達の間、青年が素早く入り込んで斧を振るう、骸骨たちはバラバラになって崩れていった。

「所長!大丈夫ですか!」

「リュウヤ…ソレにマシユ!セイカに…一般人枠のマスター…!?なんでココに…というかマシユ!その格好もしかして…。」

「ハイ、今の私は疑似英霊デミサーヴァントです。」

デミサーヴァント…?

「すみません…デミサーヴァントって何ですか?」

手を挙げて質問する、するとリュウヤと呼ばれた青年が質問に答えてくれた。

「それにはオレ、巫部颯也が答えよう。まず英霊：サーヴァントはわかるかい？」

「ハイ、過去、現在、未来あらゆる時間軸世界軸の偉人……ですよね？」

「あー、まあそんな感じそんな感じ。中には神話の登場人物とか、創作された物語のキャラクターが英霊になることもあるぜ。で、デミサーヴァントつつーのは簡単に言うて人間の身体の中にその英霊を降ろすんだよ。憑依って言い方がいいかな？」

「憑依……？」

「そ、憑依。本来は霊基つつーのが足りない英霊や普通じや召喚できなない英霊を呼ぶ時に使うんだ。マシユの場合は少し違ってね、まあそれはおいおい話すよ。」

「つまり…マシユは今サーヴァントって事ですか？」

「まあそうなるのかな？どうなの？マシユちゃん。」

「そうなりますね。」

「サーヴァントって事は、その鎧もサーヴァントさんから着せられた衣装なんですか？マシユ。」

「ハイ聖香さん。そうなります。」

マシユがサーヴァント……となるとマスターもいるんだよね、確か。

「マシユのマスターって誰なんだろ。」

単純な疑問が口から出た、すると聖香さん、巫部さん、マシユ、所長の四人が不思議そうな顔をして私をみた。

「なんで私の方を見るのさ…？え？私？」

「だって藤丸ちゃん、手の甲に令呪あるだろ？」

「です、それが証拠ですよ。」

「とうかわかってなかったの？」

「はっ、はい…。」

あはは…と苦笑いをする、右手の甲を見ると確かに赤い痣があったのが確認できた。

「…というか、なんで今頃成功したのよ。」

「…ソレは…」

——少女説明中——

「という事です。」

「成程…」

マシユが自身がデミサーヴァントとなった経緯を話終わると、付けていた通信機器に通信が入った。

『やっと繋がった…!』

「ドクター！生きてたんですね…!」

「ちよつとロマニ！どういう事!？」

『うわああ!？所長生きてたんですか!？』

「私も生きてますよ、Dr・ロマン。」

「オレもオレもー。」

『春風ちゃんに巫部くんも生きてたのかい?』

「ロマニ！どうしてそこにあなたがいるの?!」

『所長おちついてください！僕がここにいるのは僕より上がいないからです!』

「レフは!？」

『レフ教授は爆発の中心部にいたので…恐らくは…。ソレに、今そこにいる以外のマスター適性者も殆どが危篤状態です!』

「マスター適性者は冷凍保存に移行して！早く!」

『はっ、はい!』

レフ教授…爆発の中心部にいたんだ…。

「四十五人の生命なんて私には背負えない…どう説明すればいいのよ…!」

所長は頭を抱えて悩んでいる、そこに巫部さんが話しかけた。

「…あー…オルガマリーたん、悩んでるところ悪いんだけどよ。」

「…何よ?」

「ファーストオーダー、実行すんのか?しねえのか?どっちだ。」

真剣な顔で所長に聞いている、所長は涙目を拭ってから

「そうね…セイカ、リュウヤは大変だけど…ファーストオーダーは実行するわ。サーヴァントはマシユだけだけど、リュウヤ、貴方は一

人でも大丈夫でしょう?」

「おう、オレは大丈夫だぜ。聖香ちゃんはどようよ?」

「颯也くんがいてくれれば大丈夫かと…。」

「なら決まりね、リュウヤ、アンタはセイカの近くにいなさいね。」

所長は一息ついてから

「これより!ファーストオーダーを実行します!」

と言った。

第参話、初めての敵対サーヴァント

『みんな早くそこから逃げるんだ!』

「ちよつとロマン! どうい—「逃げるぞオルガマリ—たん! この感じサーヴァントだ!」ちよつと抱き抱えないで—!」

「先輩! 私達も逃げましょう!」

「えっ!? あっうん! 聖香さん早く…あれ?」

「春風先輩ならもう走ってます!」

「早!?!」

「クソが! なんでサーヴァントなんていんだよ!」

「知りませんよ!」

「サーヴァントってマシユと同じ人達ですよね!? なんで逃げてるんですか!?!」

マシユと同じなら協力とかしてくれるんじゃないか? 私はそう思いながら人間とは思えない早さで走る聖香さんと巫部さんに問いかける、マシユに抱き抱えられながら。

「いいですか立香ちゃん、サーヴァントだから皆私たちに協力してくれる訳じゃないんです! だから逃げるんですよ! 死にたくないでしょう!?!」

「殺されるんですか!?!」

「殺されるね! オレがサーヴァントなら確実にぶつ殺して魔力に変換する!」

「怖っ!?! サーヴァントって皆そんな何ですか!?!」

「皆ではありません先輩! ただサーヴァントは魂食いと呼ばれ—!

サーヴァントが来ます! 巫部先輩、先輩をお願いします!」

ポイツと私を投げるマシユ

「うおっ!?! あっぶねえ! いいやマシユ! 俺が時間稼ぎすつからお前が二人を担げ!」

「きゃあああ!?!」

「わっ、わかりました! お願いします!」

「OK！」

……まあその……私たちは逃げることになったのだった。

「クソがよオ！来やがれサーヴァントオ！時間稼ぎくれえなら出来んだよ今の俺でもなア！」

「キサマハサーヴァントデハナイナ……ダガ、イイエモノダ！」

ああまったく……なんで俺サーヴァントと戦おうとしてんだよ……まあ時間稼ぎくらいしてやる、なんとなくいい予感もするし。

ソレに俺もなんの策もなしに時間稼ぎをしてる訳じゃない。

「ヒヤツハー！汚物サーヴァントは消毒だアアア！」

「ククククカカー！」

サーヴァントは暗器（刃物だろう）を持って身軽に襲いかかってくる。オレは距離をとるため下がりつつ隠し持っていたナイフを取り出した

「フッ！」

「ハアッ！」

切りかかかって来たのでそれをナイフで受け止めつつ思いつき蹴り飛ばそうと足を振り切る。

「つ!?ゴ……ガア！」

足は届かず……代わりに腹部に一発貫う、痛いが怯む程じゃない、すぐに立て直して足を振り払う。

「キサマ……ニンゲンノクセニヤルナ……！」

「おーおーお褒めに預かりキョーエツシゴクってなあ！」

強化した拳を腹にねじり込んでこいつから離れる。と、ここで突如声が聞こえた。

「おっ、坊主結構いい動きするじゃねえか。」

声のする方を向くとそこには青い長髪のイケメン……服装と装備からして魔術師だろう、そしてこの感じ……

「キャスターのサーヴァントって所か……。まあ、これでも一応強い部類だからな、オレ。」

「へえー……良いねえ！なあ坊主、オレと共闘しねえか？」

「…良いぜ、とつとこの場から離れてえしな！少しばかりの共闘って事で！」

そう言うが早い、敵側にいつの間にか増えていたサーヴァントを後目に見つつ俺はとあることをする為詠唱を始めた。

「我が身は影！喰らえ！煙玉じゃああああ！」

「むっ…!?!」

濃い煙を発生させ、後ろに向かって走る。

「キャスター！この隙に倒しておいてくれ！あとは任せたー！」

そう、オレはキャスターにこの場を押し付けるつもりなのだ！早く逃げてやらア！

「ちよつテメエ！押し付けんじやねえ！クソ！宝具でとつと蹴りつけるか！我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社——

倒壊するは『灼^{ウイッ}き^{カー}尽^マくす炎の檻^ン』！オラ、善悪問わず土に還りな——！」

「グアアアアアア！」

フア!?なんだよそれきいてねえよ！サーヴァント共が二人共一気に消えるとか聞いてねえよ!?キャスターは二人の消滅を確認すると俺の方にマジ顔で走ってきた。

「オイ坊主！なんでオレに押し付けたんだよ!?!」

「そんなのアンタが強そうだからに決まってるだろ!?!ってかなんで着いてくんだよ！」

「さつき共闘しようぜって言ったただろうが！オラ仲間がいんだろ？とつととそこまで案内しやがれ！」

「ああクソ！本当になんてこうなっちゃったんだー！」

オレはキャスターと共に三人のところまで走って向かった。

「巫部さん…大丈夫かな…。」

巫部さんとわかれた後、私たちは学校に逃げ込んだ。

廊下に座り込んで、私は巫部さんの安否を心配していた。

「何？アイツの心配？」

と、横に座ったのはオルガマリー所長。何やら先程準備をしてくる

…と言っていたのだが、それは終わったのだろう。

「所長は心配じゃないんですか？」

「少しもしてない訳じゃないわよ、でもアイツ…リュウヤがいるならこんな場所楽々に生きて帰れるわ。レフなんかいなくても大丈夫な程に…認めたくないけど、リュウヤは頼り甲斐があるもの。」

顔を赤くして頬をポリポリとかきながら言う所長、まるで恋する乙女のように…って…いやいやまさか…

「所長つてもしかして、巫部さんのこと好きです？」

踏み込んだ発言、所長は顔から火を噴いて

「なっ、なななっ、そんな訳ないじゃない！あんな変態で！デリカシー無いやつなんて…！たっ、確かにカツコイイしちよつと良いかもとかは思ったことあるわよ？声も良いし…アツ、アイツを想ってしたことだって…って何言わせるのよお！」

「自分から言ったんですよね!？」

思いつきりビンタされた…。

「…！所長！立香ちゃん！颯也君があ！誰か連れてこっちに来てますう！」

「えっ嘘!?ヤダヤダヤダ…私髪型おかしくないかしら…!？」

「めっちゃ乙女してるじゃないですか所長…大丈夫ですよ、バツチリ決まっています。」

「そっ、そう…?？」

「はい、超絶可愛いです。」

えへへ♪と嬉しそうに頬を緩ませる所長、キャラ変わりすぎでしょ…。

と、二人で話していると階段から音が聞こえた聖香さんはいるしまシユもいる…ってことは。

「ようお前ら。無事逃げれたようで良かった良かった。」

そこにいたのは、安心しきった顔をした巫部さんと…青髪のイケメンだった。

「リュウヤ、ソイツ誰?？」

「あーコイツ?キヤスターのサーヴァントだってよ。俺らと敵対す

る気は無さそうだから連れてきた。んでキャスター、コイツらが俺の仲間だ。」

「オレはキャスターのサーヴァントだ、よろしくな、嬢ちゃん達。」

「藤丸立香です、よろしくお願いします。」

「オルガマリィ・アニムスファイアよ。リユウヤがお世話になったわね。」

「春風聖香ですう、どうぞよろしくですう。」

「マシユ・キリエライトです、このもふもふしたのがフオウさんです、よろしくお願いします。」

「フオウ！」

「…さて、オイキャスター、この街に起きてることを話してくれ。」

「…おう。」

あの後、キャスターさんはこの街…冬木で起きてた事を話し出した。

聖杯戦争と呼ばれたものが行われていたこと

しかしそれが、いつの間にか別の何かになっていったこと。

街の人間は一日にしていなくなってしまったこと。

セイバーと呼ばれる存在がまっさきに聖杯戦争を再開し、自分以外は全て倒されてしまったこと。

セイバーに倒されたものは、先程私達があつた黒いサーヴァントと同じようになってしまったこと。

「オレはこんな聖杯戦争早く終わらせた方がいいと思つてな…今も一人で奮闘中だった、んでそこでその坊主と会つたつて訳だ。」

「でだよ、さつきロマニにこれを話しててな…ロマニ、ほら話せよ。」

『ああ…、恐らくだが、この特異点の原因は聖杯だ。』

「せーはい？なんですそれ。」

「なんだ嬢ちゃん、魔術師なのに聖杯知らねえのか？」

「立香ちゃんは魔術師としてまだまだ日が浅いんだよキャスター、魔術回路だつてついさつき全開したんだぞ。…で立香ちゃん。聖杯についてだね？」

「はい、それってどんなものなんですか？」

聖杯って言うくらいなんだからとても綺麗なものなのだろう……。

巫部さんは考え込んでから

「そうだなあ……簡単に言うとなんでも願いを叶えてくれる杯……かな。」

「なんでも……？」

つまり、イケメンやシヨタに囲まれる夢も叶う!?

「……そんな素敵素晴らしい聖杯がどうしたってんですか？」

「この聖杯戦争はな、マスターとサーヴァントが1人ずつになるまで殺し合うんだよ。」

殺し……合い……？

「なんでですか？願いが叶うってんなら皆で分け与えればいいじゃないですか。」

「ソイツが出来ねえから殺し合うんだよ、じゃなきやこんなふざけた戦いやってるかっての。聖杯はな、勝者にしか与えられない。」

「……成程、そうそう簡単に皆の願いを叶えちゃくれない……って事ですね、よくあるお話だ。それで、キャスターさんはサーヴァントとの生き残りって訳ですか？」

「生き残りじゃなくて負けてねえただけだ、セイバーにな。」

「じゃあ今回の異変の原因は……。」

『十中八九そのセイバーの近くにあるだろう、キャスター、その場所ってわかってるかい？』

「わかってるぜ、ついでに真名だつてわかってる。」

そこまでわかってるんなら……それでも倒せないのなら……

「真名、なんなのよ。そのセイバーの。」

「お前さんたちの時代で一番有名であろう星の聖剣の持ち主……アーサー王だ。」

「アーサー……王……!？」

あの有名な……アーサー王伝説の……!?

「そつ、そんなの敵じゃ勝てないですよ！絶対に無理ですよ！」
聖香さん言っちゃったよ!?

「大丈夫だぜ嬢ちゃん、その盾の嬢ちゃんとセイバーは相性がいい。ついでに戦力についても大丈夫だろ、俺も勿論手伝うし坊主もいるしな。」

「俺も戦力に加えるのかよ!？」

「アンタならサーヴァントとも戦えるでしょ?それに、アレもあるし…。」

「あるけど!アレ!あるけどおおおお!痛いんだよ!」

「なんだよ坊主、やっぱりなんか隠してんじやねえか。」

「そりやなあ!アレは発動条件がなあ!」

「へえーそいつは気になる、どんな条件なんだよ。なんだ?年齢が50の時に使えねえとかか?」

「そんなんじやねえって……あの発動条件……いや、体質だからなんとも言えんけど…。」

「リュウヤはね、死なないの。」

え?

「はい?」

「はあ?」

「だーかーら、ソイツ死なないのよ。」

オラア！設定回だよおおおお！

藤丸立香の裏設定

①お兄ちゃんのノリが颯也に似てる為、実は颯也の事をお兄ちゃんだと思ってるらしい。

②激辛は大丈夫

③母親が魔術師の家系らしいが、母親自身は知らないし血も薄かった為実質一般人

④母親の実家は冬木にある、父親の実家は新宿。

⑤ちなみに住んでたところも新宿

⑥声は『どつかの三国志の世界で魏軍の軍師をやったような声』らしい。

⑦成績は中の下、得意科目は特になし

⑧後輩属性は薄いためマッシュとのフラグが立つ可能性はかなり低い。

⑨子供の頃の夢は猫になること

⑩好きな作家は水木しげる先生

⑪運動神経はいらしく、逃げ足は超一流。

⑫好きな偉人はコロンブス、理由は諦めないその生き様らしい。

⑬猫か犬は猫派

⑭血液型はO型

⑮好きなジャンルは百合甘々イチャラブもの

巫部颯也の裏設定

①肉体は現界した時からずっと変えてない、本人のものらしいが……

②カルデアに来るまでは千葉の田舎でのほほんと暮らしていた

③カルデアに来る前は近所の子供の面倒を見ていたりしてお金を稼いでいた。あんな性格だが何故か御年寄と子供に人気だった。

④カルデアに来た理由は不明

⑤声は『軽快なセリフが似合いそうな爽やかボイス』らしい。

⑥ 尚他の姿になっても基本声質は変わらない。

⑦ 好きなジャンルはホラーギャグエロ

⑧ カルデア内で動画サイトを立ち上げ、サーヴァントたちとのゲーム実況などをやってるらしい。尚利用者はカルデア全員だそうで色んなチャンネルがあるとか。

⑨ 一応英霊として呼び出せる、その際の人格はクールで落ち着いた冷酷。

⑩ オルガマリーには一目惚れして以来ピッチリとついてる。

⑪ カルデア内の女性全てに声をかけており名前も覚えてるとか。お前はただ女好きなんだ。

⑫ 猫か犬だと犬派

⑬ 血液型はA B型

春風聖香の裏設定

① 極度のブラコン、弟好きであり弟の全てを把握してる。

② 名前の由来は起源から。

③ 甘いものが好き。

④ 髪や目は地、父親がフランス人と日本人のハーフである、この為、聖香はフランス人と日本人のクォーターとなる。

⑤ 声は『おっとり穏やかなほのぼのボイス』らしい、人を落ち着かせる力のある声をしてる。

⑥ ダメ人間さは母親からの遺伝、なお容姿は父親譲り。

⑦ その起源から戦闘能力は救世主に近いそれ。本人もそれは自覚している。

⑧ 子供から好かれるタイプ、親しみやすいそのダメ人間さからくるもの。

⑨ 肉体能力はそこそこあり体力もある方。

⑩ 反面、メンタルは決して強いとは言いきれない。

⑪ 好きなジャンルは青春もの。

⑫ 犬か猫なら猫派

⑬ 血液型はB型